

# シエムリアップ Moi Moi ライフ

ISSUE  
115

「Moi Moi」とはクメール語で「ひとつずつ、ゆっくりと」の意味。恵み豊かなカンボジアでのスローライフをお届けします。



## 小出 陽子 (Yoko KOIDE)

1992年早稲田大学大学院卒。一級建築士。2000年、UNESCO/JSA 遺跡修復オフィス建設のため、カンボジアに赴任。2005年シエムリアップにレストラン Cafe Moi Moi をオープンする（一時休業中）。同年JST（NGO：アンコール人材養成支援機構）を設立し、農村地域の支援活動始める。2013年“アンコールの都の西北”に公立のバイヨン中学校を創設。2019年には高校も併設され、現在、全校生徒820人の学校運営を行っている。

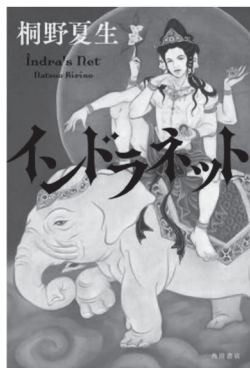
● JST ホームページ  
<http://www.jst-cambodia.net>

## 『インドラネット』

私がカンボジアに来たばかりの頃はテレビもなく、メールの送受信もままならない環境の中、毎日の楽しみは眠りにつく前に読む小説でした。仕事は深夜に及ぶことも多く、一日の終わりは頭も身体も疲労困憊。軽く読み進められ、かつストーリー展開が魅力の桐野夏生さんの小説は、数少ない娯楽の一つでした。

そんな桐野さんがカンボジアを舞台にした小説を書かれるということで、出版社の方々とシエムリアップにいらしたのは4年前のこと。あるご縁で繋がり滞在の一部をご一緒させていただきました。そして今年、待ちに待った小説が上梓されました！ タイトルは『インドラネット』。

インドラ神をイメージした神話的な内容かと思いきや、現代のカンボジアを舞台にした波乱万丈の物語で、カンボジアの熱い空気を纏いながら終盤に向かって加速する怒涛の展開にハラハラ、ドキド



桐野夏生『インドラネット』(KADOKAWA)

キ。一気に読み終えました。終盤は桐野ワールド全開！カンボジアは2泊だけしかもシエムリアップのみの訪問で書き上げたとは思えない内容で、プロの作家とはこういうものかと納得。夫の経歴に似た人物が登場したり、夫の名前が出てきたりしたのには驚きましたが、もし映像化されたら歴史に残るロードムービーとなるのでは、とも期待が…。というのも、本書はジョセフ・コンラッドの『闇の奥』を原案にしたフランシス・F・コッポラの映画『地獄の黙示録』が意識されていると、桐野さんが出版後の対談で話されていたからです。また、物語にはアンコール遺跡の描写は特にないのですが、宮沢賢治の短編『インドラの網』とあわせて読んでみてください。飛天が舞うアンコールの世界がふわっと広がります。こうして全体を俯瞰してみると、ストーリーの奥に隠された別の姿が見えてきます。そしてこの本は、悲劇の歴史と現代のカオス、カンボジア人の魂が散りばめられた、まさにカンボジアをまるごと表した現代小説なのだと思えるのでした。